富樫

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

富樫

【Ｎコード】

Ｎ４２３１Ｖ

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

勧進帳を富樫の立場から書いた作品です。作者は富樫も好きです。

第一章

富樫

彼はだ。その時安宅の関にいた。そこにおいてだ。
周りの者の声を聞いた。まずはであった。
「どうやらまことのようです」
「義経殿はこの加賀を通ってです」
「そのうえで藤原氏のところに向かうようです」
「間違いなく」
「わかった」
それを聞いてだ。彼、富樫衛門はだ。しかとした顔で頷いたのであった。
そしてそのうえでだ。周りの者に対して言うのであった。
「よいな、決して通すな」
「そうですな。頼朝様の御命令です」
「それでは通す訳にはいきませんな」
「そして捕らえたならば」
「鎌倉へ送りましょう」
「無論だ。そうする」
富樫はまた述べた。やはり強い顔になっている。
「義経様は謀反人だからこそな」
「謀反人だからですか」
「それでなのですか」
「頼朝様に弓を引いた」
富樫がここで言うのはこのことだった。
「それでどうして謀反でないといえるのか」
「ですが。それは」
「どうも怪しいのでは」
「そうです。義経様が謀反とは」

「あまり考えられませぬ」
周りの者はここでだ。誰もがだった。
あまり浮かない顔をしてだ。そのうえで富樫に話すのだった。
「むしろ。頼朝様がです」
「義経様を疎みそれでなのではないでしょうか」
「まさかと思いますが」
「それでは」
「言うな」
富樫はそうした周囲の言葉を止めたのだった。そうしてだ。
関所の中を見回す。その中は簡素であり柵に簡単な館がある。そうして彼と彼に仕える者達がいる。そうした場所であった。
その中を見回してからだ。彼はまた言った。
「問題はだ。どうした姿で来るかだ」
「義経様がですね」
「そして仕える者達が」
「どうした姿で来るか」
「そしてそれをどう見破るか」
「それですね」
「そうだ。どんな些細なことも見落とすな」
富樫は彼等に告げた。
「よいな、決してだ」
「わかっております、それではです」
「我等もまた」
「例えどうした細かいこともです」
「見落としません」
こう話してであった。彼等は義経主従を待ち受けるのであった。
そうして待っているうちにやがてだ。関所に山伏の一団が来たのであった。
そのことはだ。館に控えている富樫にも伝えられた。
「山伏か」

「はい、それが来ました」
こうだ。従者の一人が述べるのであった。
「どう思われますか」
「してだ」
ここでだ。富樫はその従者にさらに問うた。
「その山伏は何と言っておる」
「旅をしている理由ですね」
「そうだ。そのことについては何と言っておる」
こう問うのであった。
「それは何とだ」
「東大寺の件で」
それでだというのだ。

第二章

「その再建の為の布施を集める為に。旅をしているとのことです」
「そしてこの関を抜けてだな」
「北に向かうそうです」
「怪しいな」
話を聞いてだ。富樫はすぐに察した。
「古来から山伏は何かと化けやすい」
「確かに。ごまかしが利くものですし」
「だからよ。もしや」
「その山伏達こそが」
「怪しいであろうな」
富樫はいぶかしむ顔で述べた。
「化けるにはもってこいだからこそじゃ」
「ではその山伏達は」
「しかと見る」
見逃さないと。そう言うのであった。
「わかったな。ではじゃ」
「はっ、参りましょう」
こうしてだった。富樫は家臣達を連れそのうえで山伏達を待ち構えた。するとだ。
関所にだ。その山伏の一団が来たのであった。
先頭にいるのはやたらと大柄な男である。そしてその後ろには小柄な男がいる。後ろにも何人かの男達が続いていた。それを見てだ。
家臣達がだ。ひそひそと囁いた。察してのことだった。
「あの大柄な男が」
「そうだな、弁慶であろうな」
「あの武蔵坊弁慶」
「それであろうな」

彼であると。察したのである。
「それとあの小柄な者は」
「義経公ではないか？」
他ならぬ彼ではないかというのであった。
「あれだけ小柄で」
「しかも身のこなしがどうもな」
「妙に素早い」
「尋常なものではないな」
「ではな」
「やはりあの二人は」
「それにじゃ」
今度はだ。彼等の後ろの者達を見た。その数もだ。
「四天王もおるのう」
「うむ、他の主だった家臣達も」
「数は同じじゃな」
「それではじゃな」
「そういえば」
ここでだ。家臣の一人があることに気付いた。それは。
「義経殿は鞍馬山で修業されていたが」
「ああ、あの天狗がいるというか」
「あの山か」
「そうじゃ。天狗は山伏の服を着ておる」
実際に山伏が天狗と間違えられることもあった。天狗と山伏は近い関係にあるのである。
「そこで山伏の服を借りてじゃ」
「そのうえで化けてみちのくに向かう」
「考えられるな」
「確かに」
こうひそひそと話す。そしてそうして話せばだった。
彼等は疑念を確信に変えた。目の前のその山伏達こそがだ。

「間違いないな」
「うむ、あの者達こそじゃ」
「義経殿とその主従」
「間違いない」
こう言って彼等を見据える。確信したからにはだ。彼等も逃すつもりはなかった。
それは富樫も同じだ。彼は山伏達を見ながらだ。先頭のその大柄な山伏が前に出たのを受けてだ。こう問うのであった。
「それでじゃ」
「はい、それがし達がここに来た理由ですな」
「訳なくして関所は通れぬ」
こうその山伏に告げる。
「御主等はどうしてこの関所を通るというのか」
「東大寺再建の布施を集めに」
それでだという山伏であった。

第三章

「だからでございます」
「東大寺のか」
「はい」
山伏はまた答えた。
「そうでございます」
「まことであろうな」
富樫は鋭い目で山伏に問うた。
「そのことは」
「はい、まことにございます」
山伏もその目が鋭い。雰囲気も只者ではない。
それを見てだ。富樫の家臣達はまた囁く。
「あの威圧感、只の山伏であろう筈がない」
「あそこまで大柄でしかもあの威圧感」
「やはりな。あの山伏は」
「弁慶であろうな」
確信がさらに深まる。そうしてであった。
富樫はだ。またその山伏に問うた。
「それではじゃ」
「はっ、何でございましょう」
「その布施を集める頼みの文を聞こう」
これを問うのであった。布施を集めるという名分の何よりの証をだ。
「読めるか」
「わかり申した」
山伏は富樫のその言葉を受けてであった。
その手に巻物を出しだ。読みはじめるのだった。
つらつらと淀みなく読んでいく。それはだ。

見事なものだった。聞けばそれだけで確かに東大寺再建の布施の願いに聞こえる。と賀詞の家臣達もそれで幾分か納得した。
「ううむ、ここまで読むとなると」
「やはりこの山伏達は」
「まことに東大寺再建の為の」
「それではなかろうか」
こう言い合うのであった。
「ではやはり」
「この山伏達は」
「通すべきか」
「そうあるべきか」
こう話す。しかしだ。
富樫はふと動きだ。巻物を見ようとする。そこに確かに文が書かれているのかを確かめる為だ。だが山伏もそれを察してだった。
足を一歩踏んでそうして身を逸らす。それで読ませまいとする。
そのうえで文を最後まで読んでいく。文は完全に読み終わった。
読み終えてからだ。山伏は富樫に対して言った。
「如何でありましょうか」
「ふむ。確かに」
富樫も頷きざるを得なかった。そこまで見事な読みであった。
それでだ。納得する顔でこう山伏達に話すのであった。
「見事であり申した」
「確かに。東大寺再建の為に」
「みちのくにですか」
「今から参ります」
こうしてだった。山伏達は関を越えようとする。しかしであった。
富樫は見逃すつもりはなかった。緊迫した場面を乗り越えて安堵した彼等をだ。ふと呼び止めたのだった。
「待て」
「むっ！？」

「何でありましょうか」
「そこの者」
大柄な山伏の後ろにいるだ。その小柄な山伏を見ての言葉だ。
「義経殿に似ておる」
こう言うのであった。
「まさかと思うが。どうなのだ」
「違い申す」
あの大柄な山伏が富樫の前に出て述べた。
「この者は違います」
「そう言えるのか？」
「はい、疑われるのでございますか」
「似ておるからのう」
小柄な山伏を見ながらだ。尚も言う富樫であった。

第四章

「まことにな」
「おのれ、こうなったのは」
それを言われてだ。大柄な山伏は小柄な山伏を苦々しげに見据えてだ。彼のところに歩み寄りだ。
その手に持っている杖でだ。小柄な山伏を打ちすえだしたのだった。
「ええい、己のせいじゃ」
こう言ってだ。彼を打ちすえるのだった。
「己が義経殿に似ているから。我等が疑いを受けておるのじゃぞ」
「申し訳ありませぬ」
小柄な山伏はこう言って謝る。
「それがしのせいで」
「謝って許される話ではないわ」
大柄な山伏はさらに打ちすえていく。
「己のせいでじゃ。全て」
そうした打ちすえる姿を見てであった。富樫はだ。
一旦目を閉じてそのうえでだ。こう山伏達に言うのであった。
「あの」
「何でござろうか」
「疑いは晴れました」
こう彼に言うのであった。
「最早晴れました」
「左様でございますか」
「さあ、行かれるがよい」
自分から関所を通るように勧めるのであった。
「どうぞ」
「わかり申した。それでは」

山伏達は一礼してから関所を去ろうとする。富樫はその彼等から視線を逸らす様にしてだ。上を見上げてそのうえで彼等の礼を受けてから背を向けてだ。そのうえで一旦関所の館の中に入るのだった。
その富樫にだ。家臣達が声をかけた。
「あの」
「宜しいのですか？あの者達は」
「そうです、明らかにです」
「義経様達では」
「いいのだ」
富樫はこう言うのであった。彼等に対して。
「それでもだ」
「いいのですか」
「このまま通して」
「それでは富樫様がです」
「責に問われますが」
「では聞こう」
富樫は己の家臣達に顔を向けた。そのうえで、であった。
彼等に対してあらためてだ。こう尋ねるのだった。
「そなた達はあの者達を捕らえられるか」
「義経様達をですか」
「あの」
「弁慶の忠義は知っておろう」
このことも話した。
「あの者の義経殿に対する忠義の篤さは」
「はい、それはです」
「確かに」
「天下に知られていること故」
「それについては」
「その忠義者の弁慶が主君を打ちすえてまでその場を乗り切ろうとしたのだ」

富樫は何時しか泣いていた。今はもうその涙を堪え切れなかった。とてもだ。
「そこまでして。今は主を護りたいのだ」
「その忠義を知ったからこそですか」
「だからこそですか」
「この関を通された」
「そうだったのですか」
「そなた達も同じである筈だ」
その家臣達にまた告げた。
「そうだな。違うならばだ」
「それならば」
「それならばといいますと」
「追うがいい」
その義経主従をだ。そうしろというのだ。
「追ってそのうえで捕らえるがいい。手柄は思いのままだ」
「そうせよと」
「そう言われますか」
「わしは何も言わん」
確かな言葉だった。その目も。
「好きにするといい。そうしたい者はな」
ここまで言った。しかしだった。
誰も立ち上がろうとしない。動こうとしない。誰一人としてだ。
富樫はその彼等を見てだ。そうしてであった。
落ち着いた声でだ。こう彼等に言うのであった。
「では酒を用意せよ」
「酒ですか」
「それをでございますか」
「捕らえはせぬ。しかしだ」
それでもだというのである。
「弁慶殿の忠義にだ。酒を差し上げよう」

「そうですな。それでは」
「今から弁慶殿のところに向かい」
「そうしてですね」
「そうだ、差し上げるとしよう」
捕まえはしないが追う。今はそうするというのだ。
「ではな。よいな」
「はい、それでは今より」
「義経様達のところに向かい」
「そうしてですね」
「そうするぞ。いいな」
こうしてであった。富樫は酒を用意させそのうえで義経達を追うのであった。
経つその前に頬を拭った。そこにあるものは。彼が今まで感じ取った中でだ。最も熱く澄んだものであった。

富樫　　完

２０１１・２・２６

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4231v/

富樫

2011年8月2日03時28分発行